

聖書：コリント人への手紙第一 11：17～22

説教題：神の教会を軽んじる？

日時：2022年10月9日（朝拝）

11章2節からコリント教会の集まりにおける問題、特に公的な礼拝に関連して生じていた問題が取り扱われています。前回まで見た一つ目の問題は礼拝におけるかぶり物のことでした。今日から二つ目の聖餐式に関わる問題が取り上げられ、11章34節まで続きます。ここを3回に分けて見て行きたいと思います。

さてこの二つ目のことを命じるにあたってパウロの調子は一つ目と比べて厳しくなっています。それは2節と17節を見比べると分かります。2節でパウロは「私はあなたがたをほめたい」と言っていました。それに対して17節では「私はあなたがたをほめるわけにはいきません」と言っています。明らかに対照的ですね。2節ではコリント人たちが、パウロが伝えた使徒的教えを堅く守っていることが賞賛されました。それに対して今回ほめるわけにいかないのは使徒的教えから逸脱していたからでしょうか。17節に結果として、彼らの集まりが益にならず、かえって害になっていると言われます。本来、教会は集まることによって互いが益を受ける場であるはずで、教会の主であるキリストを中心として互いに愛し合い、励まし合う交わりがあるはずで、ところがコリント人たちの集まりは害をもたらし、そこに集う人たちにマイナスの効果をもたらしていたのです。

その問題とは何だったのでしょうか。それは18節にある通り、あなたがたの間に分裂があるということでした。分裂というテーマは、この手紙の最初の方に出て来ました。1～4章では、どのリーダーに付くかを巡ってコリント教会には分派あるいは党派が生じていたことが述べられました。しかしここでの分裂は、それとは違うことのように、18節に「あなたがたが教会に集まる際、あなたがたの間に分裂がある」と言われています。彼らが集まる時に分裂が生じていました。集まるたびごとに教会の一致とは反対の状況が現れていました。それはこの後見て行くと分かりますように、社会的・経済的に富んでいる者と貧しい者との分断です。教会は主にあって一つであるはずなのに、社会的階層をもとにした分裂が生じていました。パウロはこの知らせを耳にして「ある程度は、そういうこともあるかと思います」と言います。そして19節では「実際、あなたがたの間で本当の信者が明らかにされるためには、分派が生じ

るのもやむを得ません」と言います。ここを読んで戸惑いを覚える方もいらっしゃるかもしれません。パウロは分派を許容しているのかと。それは害をもたらしていると述べて、これから訓戒しようとしているはずなのに、その矢先にそれもやむを得ないといきなりトーンダウンしているとはどういうことかと。ある意味でパウロがここで言っているように「本当の信者が明らかにされるために」分派が生じるのはやむを得ないと言える面があるかと思えます。ここに「本当の信者が明らかにされる」とありますように、目に見える教会には本当の信者とそうでない者とが混じっています。イエス様のたとえを用いれば、良い麦に毒麦が終わりの日までは混じっています。この良い麦と毒麦がいつまでも仲良く共存できるわけではありません。終わりの日にかけて、そこに衝突やぶつかりが生じてもおかしくありません。イエス様はマタイの福音書 24 章 10～12 節でこう言われました。「そのとき多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合います。また、偽預言者が大勢現れて、多くの人を惑わします。不法がはびこるので、多くの人々の愛が冷えます。」これは前後関係を考慮すると教会の中でのこと、信者たちの間でのことを言ったものと考えられます。そして次の 13 節で「しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます」とイエス様は言われました。つまり教会には分派を含む様々な困難が生じるだろうけれども、最後まで耐え忍ぶことによって本当のクリスチャンは明らかにされて行くということです。ですからこの 19 節は、分派が生じるのもやむを得ないとパウロが許容しているのだから、そういうことがあっても良いのだ！と特に教会の中で分裂を引き起こしている張本人が自らを正当化するために使ってはなりません。確かに教会にこのような混乱が生じることはやむを得ませんが、そういう中で本当の信者が明らかにされようとしている。だから一層襟を正して自らを点検し、最後まで耐え忍んで本当の信者であることが明らかにされて行くよう努めなければならないと導かれるべきです。分派活動に乗っかったり、それに踊らされて教会をかき乱し、本当の信者でないことが明らかにされて行く者ではないように。自分の振る舞いに注意し、主の民であることが明らかにされる歩みをする者でなくては！と自らを省みる者でなくてはなりません。

さてこのコリント人が集まる際の分裂とはどういうものだったのかが 20 節以降に具体的に語られます。それは主の晩餐と関わっていました。20 節の言い方から分かることは、コリント人たちは一緒に集まって主の晩餐を食べているつもりだったかもしれませんが、あなたがたの今のやり方では主の晩餐を食べることにはならないとパウロが言っているということです。21 節に「というのも、食事のとき、それぞれが我先

にと自分の食事をするので、空腹な者もいれば、酔っている者もいるという始末だからです」と続きます。ここに当時のコリント教会では食事と聖餐式が一緒に行われていたことが伺えます。これは使徒の働き 2 章のペンテコステ後の教会にも見られた姿でした。使徒の働き 2 章 46 節に彼らは「毎日心を一つにして宮に集まり、家々でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともし」とあります。またユダの手紙には「愛餐」という言葉が出て来ます。杉並教会でコロナ前に行っていたランチクラブがそれに相当するのでしょうか。これは聖餐式が愛餐と一緒に行われなければならないという意味ではありません。愛餐は聖書で命じられていることではありません。それはクリスチャン同士の自然な交わりの現れです。もともと食事は親しい交わりの象徴でした。ですから主にある者たち同士が主にある家族として、何かを持ち寄ることができる者は持ち寄り、互いに分ち合って親しく食事することは自然的な発露と言えます。そして当時はこの愛餐とセットで聖餐の時が持たれていたようです。イエス様が制定された最初の聖餐式が夜の食事の時に行われたように、コリントでも夜の食事とセットでなされたのでしょうか。果たして聖餐式は食事の前に行われたのか、それとも後に行われたのか、それとも食事の最中に行われたのか議論がありますが、とにかく同じ席で行われていたことがここから伺えます。

ところがでした。その食事において、我先に！と彼らは食事をしていたと言います。みなに分ち合って食べるのではなく、自分の食事することに重心が移動してしまっていた。その結果、空腹な者もいれば、酔っている者もいるという始末だったとあります。これはどういうことだったのでしょうか。詳しい背景については色々な見方があって断言するのは難しいのですが、次の 3 つのことは言えるように思います。まず我先にと皆が食べる結果、空腹な者がいると言われていますが、この空腹の状態に置かれた人とは、22 節に出て来る貧しい人たちのことだったであろうということです。おそらく貧しい人たちは遅くなって、その日の仕事が終わってからでないこの場に来ることはできませんでした。特に奴隷である者たちは一日の時間を自分の自由には使えません。そういう彼らが働きを終えて駆けつけると、もう食べ物はそのほとんどなかった。食事とは別に聖餐式にはあずかれたかもしれませんが、みなと同じようにはお腹を満たすことができず、空腹状態に置かれた。その結果、恥ずかしい思いをさせられていたということです。2 つ目に 21 節にそれぞれが「自分の食事をする」とあります。基本的に愛餐はホストの家が用意してくれるものに加えて、食べ物を持って来れる人が持ち寄って行われました。中でも裕福な人、富んでいる人は多くを持つ

て来ることができたでしょう。本来それらはみなで分かち合って食べるべきでした。それが愛餐です。ところがどうもコリント人たちの食事は自分が持って来たものを自分で食べるという利己的の食事になっていたようです。「我先に食事をする」という言葉は「貪り食う」という意味だと解説する学者もいます。豪華な食べ物を持って来た裕福な人は、みんなに分けるよりも自分で食べていた。あるいは自分と同じような社会的地位にある人たちとの間でだけ食べていた。そこに貧富の差が現れていたということです。そしてもう一つ、当時の家の構造や人を招く習慣について多くの学者が言っていることがあります。当時の教会はご存知の通り、家の教会です。今日の教会堂のような専用の建物を教会が持つのはもっと後の時代のことです。比較的大きなスペースを持つ裕福な信者の家が集会場として用いられました。そして当時そのような家がお客をもてなすダイニングルームは 10 人弱程度の人々が入れたようです。そこではリクライニングしながら食事することができました。その部屋はその家の主人と関係の近い裕福な人、社会的地位のある人が優先的に占めたのでしょう。それ以外の人々の中庭あるいは廊下で食べたと考えられます。そしてそこで出されるもの、また持ち寄ることのできる人が持ち寄って食べたものはダイニングルームで食べる人たちのそれとは質においても量においても異なっていた。こうしてそれぞれの場所で、それぞれの階級に従い、様相の異なる食事会となっていた。そんなところにやって来る貧しい人たち、特に後からやって来る人たちにとって、それは恥ずかしい思いを持たずにはいられない愛餐となっていたということです。片やすでに食べて酔っている人たちがいるのに、片や空腹で立っている人たちいた。そんな食事と聖餐がセットになっていましたから当然、聖餐式も正しいものにはなっていなかったのです。

このようなコリント人に対してパウロは語ります。22 節：「あなたがたには、食べたり飲んだりする家がないのですか。それとも、神の教会を軽んじて、貧しい人たちに恥ずかしい思いをさせたいのですか。私はあなたがたにどう言うべきでしょうか。ほめるべきでしょうか。このことでは、ほめるわけにはいきません。」 今日はこちらまでですので、ここから 2 つのことに注目して終わりたいと思います。まずここに示されている一つのこととは公私の区別をつけるべきであるということではないでしょうか。今回のことに関するコリント教会の問題は、裕福な人たちが自分の家ですべきことを教会に持ち込んで来たために発生したと言えます。彼らは豊かな食事を持ち込んで、自分たちと親しい人たちとだけ、自分たちと近い階級にある人たちとだけ、楽しみました。教会の交わりを自分たちが好む社交場とし、自分たちの欲求を満たす場と

していました。自分の家でそれをせずに、教会の集まりにおいてそれをしようとしたため、自分の欲求を満たすことが教会の交わりの場でも上位の関心を占めることとなり、同じ場所にいる他のすべての兄弟姉妹への配慮に欠けてしまっていた。自分たちがそこで楽しむことがメインとなり、一部に悲しむ人、恥ずかしく思う人がいても、そちらに気が回らなかった。そうして結局、教会の中にこの世的なものを持ち込み、またこの世的な分断を持ち込むこととなっていたのです。ですからパウロは「あなたがたには、食べたり飲んだりする家がないのですか」と 22 節で言っています。この意味は、あるなら自分の家で食べたり飲んだりしなさいということでしょう。後の 34 節でははっきり「空腹な人は家で食べなさい」と言われます。つまり日常的また個人的な欲求は自分の家で満たすべきであるということです。それを教会に持ち込んではいけません。なぜそうかと言えば、それは教会に来た時は教会がすべきことに集中するためです。そうでないと教会が大切にすべきことを教会が行えないことになってしまいます。

そしてもう一つ心に留めたいのは、「神の教会を軽んじるのですか」というパウロの言葉です。裕福な人たちは自分のしたいこと、自分が楽しめるものを教会に持ち込んで、いわば教会を私物化していました。教会を私有化していました。そんな彼らに対してパウロは、ここは「神の教会」であるということを思い起こさせています。ただの教会ではなく、「神の教会」です。その教会でそのように振る舞って、あなたがたは神の教会を軽んじているのですかとパウロは問います。ここで特に考えられているのは、その次にあるように、彼らが貧しい人たちに恥ずかしい思いをさせていたことでした。そのことを指して「神の教会を軽んじている」とパウロは言います。このことは神は貧しい人たちをも等しく大切にしておられるということを示しています。神の教会は、貧しい人たちも大切にされる集まりであり、また共同体です。この後の 12 章 13 節でパウロは教会についてこう言います。「私たちはみな、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によってバプテスマを受けて、一つのからだとなりました。そして、みな一つの御霊を飲んだのです。」 どんな人種であろうと、またどんな社会階級に属する人であろうと、それによって分断されず、みなが主にあって平等であり、一人一人を大切にすることが神の教会には求められています。そのことを喜び合う交わりに生きることが神の教会を尊ぶ生き方です。そして聖餐式はそのことを象徴するものです。

次回の 23 節以降でパウロは聖餐式の意義を改めて述べて、その精神に立ち返るようにとコリント人たちに語ります。主は私たちのために一体何をしてくださったのかを覚え、その主に感謝し、主に倣って互いに愛し合う歩みへ進むようにと私たちは聖餐式を通して強められるべきです。その聖餐式の意義をもう一度わきまえ知ることによって、当時セットで行われていた愛餐の交わりも導かれるべきです。そうするならば彼らの集まりは害をもたらすものではなく、益をもたらすものとなるはずでしょう。

私たちの集まりはどうでしょうか。益をもたらすものとなっているでしょうか。公私の区別をつけずに自分の家ですべきことを教会でしようとする、私たちは教会においても自分の必要を満たすことに思いが優先的に向いてしまい、他の人々を配慮することができなくなってしまいます。そしてここは教会なのに、教会的ではない、この世的なものを持ち込んでしまうことにもなります。教会では教会のなすべきことに集中できるように、自分の家ですべきことは自分の家です。そして教会では主を礼拝し、主を賛美することに焦点を合わせるように。また教会が大事にすべき人々を大事にすることができるように。そのために心も体もささげることができるよう自らを整えて、私たちが集まる時、それが益をもたらすものであり続けられるように、そしてそのことをもって神に栄光を帰す神の教会であり続けられるように祈り求めてまいりたいと思います。